

「帆を上げよ、高く」について その1

尾崎 徹

この曲には、福永陽一郎と新島襄へのオマージュが込められている。

二十歳でアメリカへの渡航を決意し、帰国後同志社を開いた明治の教育者・新島襄がアメリカ商船ベルリン号に忍び込み、上海経由でアメリカに密出国をしたのは、翌々年、二十二歳の時だった。船上での彼の目に、風をはらんだ帆と帆柱(マスト)はとても心強く思えたことであろう。

10年に及ぶアメリカ、ヨーロッパでの研鑽を経て帰国。まもなく同志社を開校し、4年後、第1期卒業生に送った言葉がああ英文である(一部相違)。若き教育者が彼らに贈った『力強く心安らかに進みなさい、導かれた御手に従って』の言葉で15名の卒業生はどんなにか勇気づけられたことだろう。

第三曲の英文、だがこれは単に新島襄の言葉を借りた若者への励ましの歌ではなく、むしろ人生を重ねてなお二十歳(ハタチ)の気持ちを忘れることのない『心の中にいる永遠の青年』たちへのエールでもある。

同志社グリーの卒業生で自ら『福永先生の最後の弟子』と称する指揮者・伊東恵司氏(アカデミーで言えば28期)は、卒業後、「なにわコラリアーズ」の指揮者としてコンクールで輝かしい業績を残してきた。同時に「みなづきみのり」のペンネームで数々の詩を書き、この「帆を…」の詩も40代後半に書かれたものと思われる。勿論同志社グリー現役生への励ましの気持ちが込められているが、同時に自身の世代と、かつての強い想いに触発され続けているさらにその上の世代に向けての応援歌ともなっている。

そして福永陽一郎先生への哀惜の念。『細長い身を屈め』『折り畳んだその長い指先の骨に』『不器用に頬を擦る』『愁いある指先よ』…

伊東恵司氏が学生指揮者だった頃、福永先生は既に最晩年。京都へ指導に行く回数も限られていたことであろう。4年間殆ど途絶えることなく指導を受け、合唱基礎のほとんどを語り示された先生を間近に見てきた私からすれば、伊東氏が出来る限り多くのことを吸収し、全てを目に焼き付けようとしたその洞察力と才能に頭が下がる。

周知のとおり男声合唱曲「月光とピエロ」に触発された詩でもある第二曲「春愁のサーカス」。先生にスポットをあてて題名は「春愁のピエロ」でもよかったであろうに…。氏は『今は彼方に佇む』ピエロにではなく、それを見続け、慕い、『永遠の時間を感じながら』歌い続ける私達—あたかもサーカスの「観衆」—にスポットを当てたかったのではなかろうか。そういう意味でこの詩は福永陽一郎へのオマージュであるとともに、先生を慕い残された人々へのレクイエムでもある。

2018.05.09